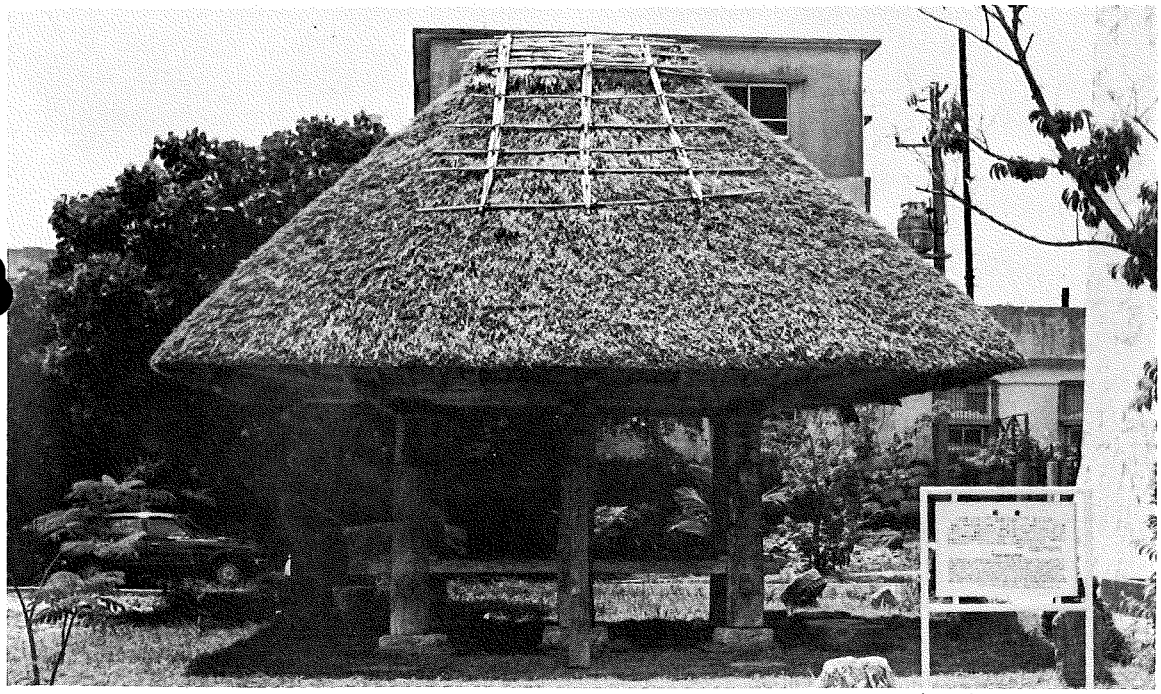
沖縄県立 博物館だより 1977.3 No.2



高倉全景

高倉の寄贈を感謝す

館長　外間　正幸

このたび博物館の前庭に、当館多年念願の高倉が、移築され、当館の庭も一段と趣きを増しました。風格のある立派なものなので、観客の眼を引きつけております。高倉は民俗、学術の資料として貴重であるばかりでなく、観光的にも価値のあるものです。

この高倉は沖永良部島の沖野千代さんの屋敷に建っていたもので、前年葺き替えたばかりでしたが沖野さんは沖縄の博物館へならばと、快く寄贈くださったのであります。その寄贈を斡旋してくださったのが同島の医師吉松軍八氏です。吉松氏は当館の要望に応え、島中を探し廻ってやっとこの高倉を見つけて沖野さんを説得し、移築までいろいろ尽力くださったのです。

その他、沖野さんの親戚の中野氏や大工棟梁の川畑義経氏、運送会社の樸孝志氏、沖縄側では元琉大教授仲宗根政善氏や読谷村立歴史民俗資料館の名嘉真宜勝館長等多くの方々が移築に協力されました。一方予算面でも県の特別な配慮があって、無事に移築できたことは喜びにたえません。ここに沖野さんをはじめ関係者の皆様方の御厚意と御協力に対し、深く感謝を申し上げる次第であります。

沖永良部島から高倉が寄贈される

沖縄で残り少なくなった高倉が、先ごろお隣りの沖永良部島の一個人から贈られ、当館の前庭に建てられて、来館者の人気を集めている。

この高倉は、鹿児島県大島郡知名町新城に住む沖野千代氏が亡夫重盛氏の遺志を受けて寄贈したものである。当館では創立30周年を記念するものとして、予算を計上し、移築を行なった。

移築前の高倉

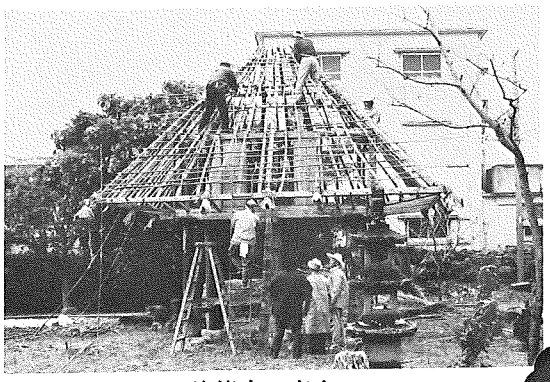
高倉は、刈り取った稲を保管する倉として古くから作られた。1719年に尚敬王の冊封副使として中国から来琉した徐葆光の『中山伝信録』は「米廩(べいりん)」と記録され、「米を蔵むるくら。亦地を懸るに四五尺、遠く望めば草亭の如し。下に十六柱を施す。柱間の空処人行を通す可し。上に版閣を為る。官倉皆此の如し。村民は或は数家共に一亭を為り、米を其の中に蔵め、日を分って守望す」と説明している。

これによると、16本柱があったようであるが、近年沖縄や奄美地方に見られる高倉は4本柱が多く、時には6本柱、9本柱が見られた。歌に歌われた高倉は「四ツ股、八ツ股」が多いようである。

移築された高倉は6本柱で、構造的には沖縄型より奄美大島型に近い。壁に当る部分が床面よりわずかに勾配をなすので、それとわかるような平べったい感じの造り方になっている。これは建築家の間では、沖縄型より一歩進んだ型として注目されている。柱の高さは210cmで、柱に直接支えられた床面に籾俵を積みあげ、約60俵保管できたといわれる。奄美では、昭和期に入ってからの建造も多かったらしく、移築された倉も昭和10年ごろに建てられたものである。裕福な家のシンボルとして“家の華”と呼ばれて来た。

昨年10月ごろ同島在住の医師吉松軍八氏から、台風で倒壊する高倉が多いので、沖縄県で貰い受け移築しては、との話が持ち込まれたのが、この高倉が移築されるようになったきっかけである。当館でもかねがね高倉移築を予定していたので、検討した結果、永久保存のためには倒壊したものではなく、しっかりした高倉が欲しい旨申し入れた。吉松氏に仲介の労をとってもらい、沖野千代さん所有の無傷の高倉を好意によって寄贈してもらい、移築するはこびとなった。

昨年12月13日から4日間の日程で館長外職員2人が同島を訪れて解体作業を行ない、船便の都合

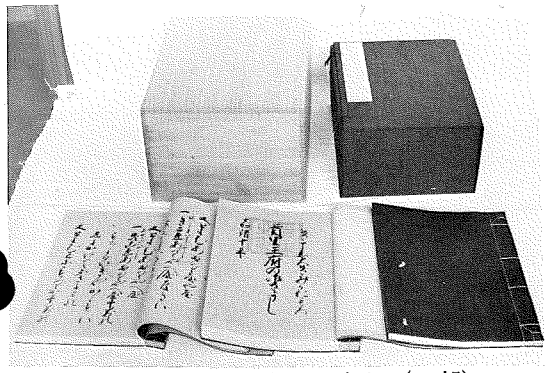


建築中の高倉

などで同24日に搬入した。それから1月10日までの間に茅刈り作業をすすめ、10日から数日かけて、組立、葺かえ作業を完了した。移築にあたっては、寄贈者の沖野さんをお招きし、また同島の大工棟梁川畑義経氏には組立作業の指揮をしてもらった。沖永良部島では本来チガヤやススキで屋根を葺くが、丈夫さと美観を保つためにリュウキュウチクによる「竹葺き」に変更した。竹葺き専門職人は読谷村立歴史民俗資料館のはからいで、同村座喜味から来てもらった。(学芸員　上江洲　均)

「おもろさうし」の修理なる

当館所蔵の尚家本「おもろさうし」は、昭和49年11月から約2年2ケ月の間、池上国宝修理所で修理が行われていましたが、その修理が終り、去る1月21日に当館に戻ってきました。



修復なったおもろさうし（一部）

この「おもろさうし」は尚王家に伝わっていたもので、現存本中最古のものです。1710年に具志川本（現存せず）を書写したものといわれます。沖縄戦の際尚家から紛失しましたが、戦後米国に現存することがわかり、仲原善忠氏、吉里弘氏、ウイリアム・デビス氏その他の関係者による返還運動によって、1953年5月に返還が実現、当館の前身である首里博物館に納められました。昭和48年6月、国の重要文化財に指定されています。

大正年間に修理が行われたようですが、その時とじ違いがあったことや、戦時中に汚損が進んだらしく保存状態もよくなかったために今回の修理となったものです。修理は文化庁の昭和49年、50年度の美術工芸品保存修理事業費約550万円で行われました。

1月21日には修理にあたった池上幸二郎氏御夫妻も来沖しました。当日は、特別展示室で帰ってきた「おもろさうし」を公開する一方、教育庁文化課の主催で、御夫妻を迎えて修理完了の祝賀会が催されました。

翌22日には、沖縄県文化財修理技術者協会の講習会が博物館講堂で開かれ、池上氏御夫妻も「『おもろさうし』の修理が完了するまで」と題して

池上幸二郎氏御夫妻（右は森八郎東京国立文化財研究所調査員）

講演を行いました。両氏は、大正年間に行われた修理で上下左右が切られた形跡があるので、元の大きさに近い形にもどしたことや、とじ方に工夫を凝らしたことなど、紙質や製本方法の話もまじえて修理の経過を語りました。

なお、当館所蔵の国指定文化財「混効験集」も同氏の手によって近々修理が始まることになっています。

3月25日に沖縄県博物館協会（仮称）結成第1回準備会

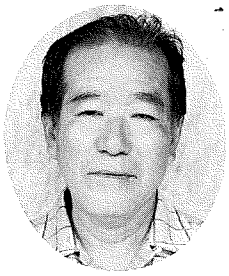
3月25日午後2時30分から沖縄県立博物館、石垣市立八重山博物館、読谷村立歴史民俗資料館3館が呼びかけて、「沖縄県博物館協会（仮称）」結成第1回準備会が開かれることになりました。県下には公立、私立、大小合わせて30余の博物館、資料館、美術館、民芸館等がありますが、従来、これらの博物館関係施設相互間には何の連絡体制もなく、それがひいては県下の博物館活動の進展を妨げる一因にもなっていました。そこで、3館では博物館関係施設の連絡提携を強めることを第一の目的として「沖縄県博物館協会」（仮称）を結成する方向で意見が一致したため、今回の第1回準備会開催となったのです。第1回準備会参加呼びかけは下記の館園に行われます。(順不同)

東亜観光多幸山ハブセンター，大嶺薫美術館、ケイブランド観光玉泉洞、沖縄県立海洋博記念沖縄館、諸見民芸館、沖縄子どもの国、東南植物楽園

沖縄県立博物館への提言

安らぎを求めて

曽根　信一

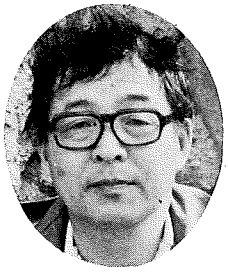


2階増築後のここの、総合博物館としての充実ぶりは目覚しい。それぞれの分野で、整然と系統的に展示されている豊富な資料。広い新しい館内を、あの部屋からこの部屋へ、1階から2階へと見て廻っている間に、脚も神経もいい加減くたびれてしまう。そんな時に、美術工芸室から民俗室へのほの暗い階段に近づくと、何だかホッとする。右手はアルミの手すりで、左手はただの壁で、上って行く向うにはほんのりと明るい空間があって、周囲には見なければならぬものは何もない。ゆっくりと階段を上りつめている間は、一種の解放感にひたれるというわけだ。

一仕事終った後などで、何となしに博物館に足を向ける人々、研究家でも観光者でもない別のタイプの人々、いわば常連とでもいうべき人々が、30年もこしたこの博物館にも、もうそろそろできていいのではないか。心のいこいの場として、気楽に杖を曳く人々が。　それにしても、建物の威風は止むを得ぬとしても、車止めから玄関までの道のりが、南国の太陽の下では余りに明るすぎるのではないか。どうも、人の心を弾き返すような、影を伴わない明るさではなかろうか。近頃高倉ができたため、あれだけの、文字通りに「奥行かし」の風情がでてきた。もう一歩進めて、あの道のりを、沖縄産の各種蔓草の緑のトンネルで覆うてみたらどうだろう。人々は蔓草園のほの暗い道にさそわれて、縞模様の影（今は何とのっぺらぼうの道だろう）をふみながら、ほぐれた楽な気持で、折りにふれ時につけてここを訪れてこようというものだ。私は展示物に残る歴史の影、あの階段に漂う光の影がもっとほしい。（ヤチムン会会長）

博物館に

木崎　甲子郎



わたしは本土からの客には、かならず博物館の見学をすすめることにしている。博物館はその土地の文化の集約されたものだからだ。

この博物館も例外ではない。民俗・民芸、歴史など、この規模のものとしてはよく整備されていて、それなりに楽しい。

ところが、見て帰ってきた友人たちはかならずといってよいくらい、「ノグチゲラとかトゲネズミは何処に行けば見られるのかね」といぶかる。ハブは今や見世物になっているから何処でも見ることができる。しかし、イリオモテヤマネコはおろか、沖縄の代表的な動物や植物を沖縄中探しても展示しているところはない。

沖縄には生物学的に貴重な動植物が分布していることは有名だし、ジャーナリズムも声高にそれをうたいあげている。しかも、それは自然保護運動と直接にかかわりのある事柄だけに、われわれ県民としては深い関心がある。

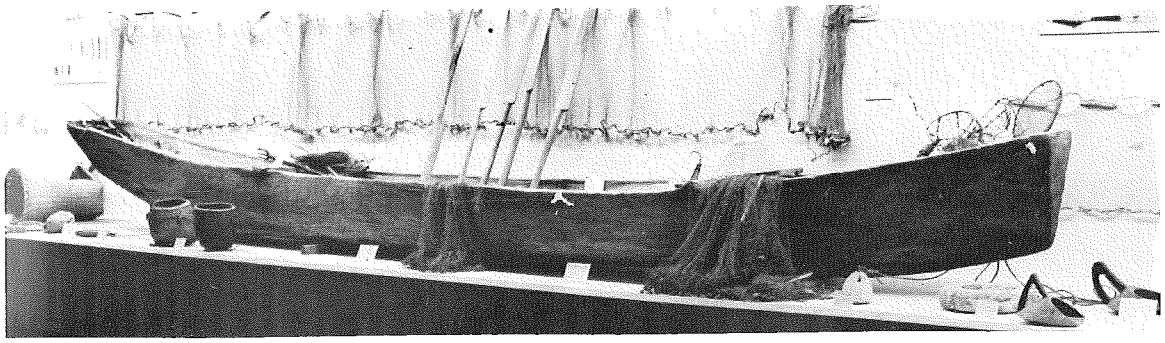
じつは、地元にいるわたしでさえ、トゲネズミやケナガネズミのような沖縄固有の動物を見たことがない。おそらく大多数の庶民は話やせいぜい写真だけでしか知らないと思われる。せめて剝製ぐらいは博物館に陳列して欲しいと思うのはわたしだけではないであろう。実物も見せないで、沖縄には貴重な生物が沢山あって、それを保護しなければならないと云ったところで、そのかけ声も中身はうすい。

いってみれば、現在の県立博物館に沖縄の自然に関するものが欠けているということだ。県民のための博物館ならば、すくなくも、沖縄固有の生物の展示ぐらいはすべきだろう。

そうなれば、わたしのささやかな県民税も拂ったかいがあるというものだ。（琉球大学教授）

〈新収蔵資料紹介〉

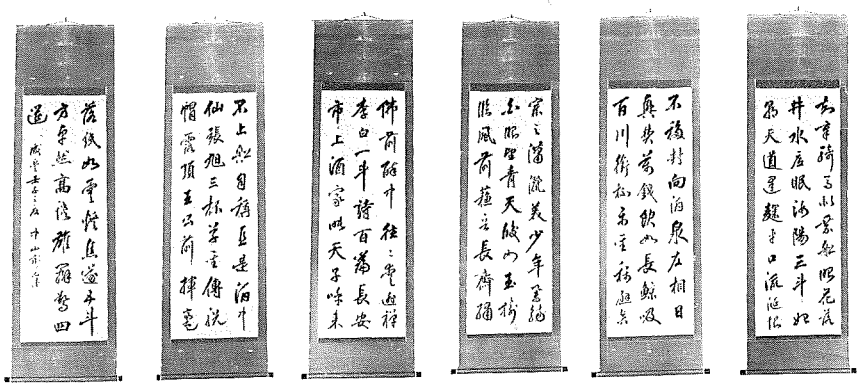
サ バ ニ



昭和49年から寄託を受けて展示していた貴重な民俗資料である琉球松製丸木舟（サバニ）が、このほど正式に当館に寄贈された。贈り主は名護市我部に住む嶺井宗太郎翁で、孫に当る大嶺実清氏（首里石嶺窯代表）を通じて当館入りした。

この舟は、１本の松を刳ったマルキンニ（丸木舟）で、長さが約７ｍ、最大巾85cm。　戦後も一部の地方では造られたといわれるが、現存するものはきわめて少ない。このサバニは造られてから100年近くなるといわれ、63年前嶺井氏がまだ25才の頃国頭村から求めたものという。嶺井翁はこれで石運びなどをして12人の子供を養育した。屋我知島から本島への渡し舟に用い、戦時中は本島から日本軍を屋我知へひそかに渡して助けたりなどしたとのことである。半世紀にわたって嶺井翁と共に過ごしてきた記念すべき舟である。

鄭元偉書軸



本年度購入した優秀品の一つに、６幅対からなる鄭元偉の書軸がある。これは『唐詩選』中の杜甫の詩「飲中八仙歌」を行書体で書いたもので、同詩は当時の酒豪８人（知章（ちしょう）、汝陽（じょよう）、左相（さしょう）、宗之（そうし）、蘇普（そしん）、李白（りはく）、張旭（ちょうきょく）、焦遂（しょうすい））の酔態を詠じた有名な詩である。

この書軸は、東京の山中純孝氏の父君が、40年ほど前、米国はサンフランシスコにおいて求め、爾来愛蔵して来たもので、晩年は沖縄へ返したいことをもらしたそうである。山中氏はその父君の遺志を受けて、県東京事務所にその旨を申し出、当館へ入るきっかけとなった。

鄭元偉は、鄭嘉訓の次男として久米村に生れた。伊計親雲上の名で活躍し、のち小禄湖城村の地頭となって湖城親方長烈を名乗った。19世紀中期の政治家・書家として知られ、父嘉訓同様薩摩においても藩士の書の指導にあたったことがあり、鹿児島滞在中に揮毫した「徳高」の扁額（薩摩商人が太宰府天満宮へ奉納したもの）は有名である。

昭和52年度博物館文化講座予定表

昭和52年

4月23日	おもろの話	池宮正治氏 (琉大助教授)
5月28日	尚家本「おもろさうし」を読んでみよう	池宮正治氏
6月25日	沖縄の藍	大城志津子氏 (琉大助教授)
7月23日	拓本のとり方	崎間麗進氏 (沖縄拓本研究会)
8月20日	沖縄の竹細工	勢理客幸英氏 (竹細工技術保持者)
9月24日	ハブの話	高良鉄夫氏 (琉大教授)
10月22日	沖縄の植物自然	新納義馬氏 (琉大教授)
11月26日	山原の自然	友利哲夫氏 (名護高校教諭)
12月17日	びんがたの製作工程	名渡山愛拡氏 (びんがた作家)

昭和53年

1月28日	沖縄の酒	平敷令治氏 (沖縄国際大助教授)
2月25日	沖縄の原始農耕	新田重清氏 (当博物館学芸員)
3月25日	薩摩の琉球支配の構造	喜舎場一隆氏 (琉大助教授)

博物館文化講座は8月、12月を除く毎月第4土曜日に開きます。
会場は博物館特別展示室で、聴講は無料です。

昭和52年度特別展

5月14日(土)～5月26日(木)	新収蔵品展
6月14日(火)～6月26日(日)	沖縄の藍展
8月9日(火)～8月21日(日)	沖縄の竹細工展
10月1日(土)～10月20日(木)	渡喜仁貝塚、苦増原貝塚発掘考古資料展

資料寄贈者御芳名(2)

新城　蒲吉氏(ペルー、リマ市)	三味線1点
渡口　文子氏(那覇市)	ハカマ(新作)2点
森田　文氏(那覇市)	カイ(衣裳入れ)等5点
亀浜　常久氏(平良市)	水甕等4点
大浜　晴美氏(那覇市)	位牌、香炉、対瓶等18点
沖野誠四郎氏(知名町)	ホヤランプ1点
沖野　千代氏(知名町)	高倉、俵編み台等22点
上地　完吉氏(名護市)	壺型厨子甕4点
普天間ツル氏(佐敷村)	糸車1点
新屋敷幸繁氏(沖縄市)	漬物甕1点
志堅原良明氏(那覇市)	板戸、荒焼三耳壺等14点
松田　裕作氏(京都市)	質問本草内篇巻3、巻4、漆器1点
国場　幸盛氏(那覇市)	重箱(ケース入り)1点
伊藤　勝一氏(京都市)	鉄製木炭アイロン3点
玉木　正吉氏(石垣市)	アンガマ面2点
普天間　敏氏(佐敷村)	壺1点
新川　静夫氏(宜野湾市)	高倉模型他1点
嶺井宗太郎氏(名護市)	松くり舟1点

沖縄県立博物館だより　No 2
発行年月日　昭和52年3月24日
編集・発行　沖縄県立博物館
〒903　沖縄県那覇市首里大中町1の1
TEL. 0988-32-2243